



千の手

犬山

つがおかのん
継鹿尾観音

寂光院

馬め

鳴みよう

菩ぼ

薩さつ

御み

影え

養蚕守護



山尾鹿継國張尾

江戸後期より当山に伝わる版木による
養蚕守護札
彩色・前田道雄氏・当山写仏教室講師

当山蚕堂に本尊へ養蚕守護尊、現在でいうファッション・デザインの守護尊へ

白馬に乗り、白い衣を着て、花の冠をかぶり、右手に桑の枝
左手に蚕のまゆ玉（絹糸）を持つ

千の手



継鹿尾山 寂光院

山主 松平 實胤
まつ だいら じつ いん

先日、詩人・坂村真民師の「手が欲しい」(本紙(3) 参照)、「手となろう」(『朴』所収)という詩に出会うことが出来た。

盲目の子が描いたお母さんという絵には、二十六本もの手がかいてあったそうだが、それをご覧になって師は、千手観音さまの実在を確信されたという。

母の絵を描けと言われれば上手、下手は別として、それなりの顔形をかくことは出来る。しかし、生まれてこのかた、盲目の子にとって、母の存在は顔形ではなく、自分に尽くしてくれるその手のぬくもりであったようだ。

二本の手では できない事だ

それを描いた子供の心を私はうかがい知ることは出来ないが、恐らくこのように考えたに違いない。

お母さんはね、朝起きればバジャマを着替えさせてくれるよ。朝ごはんも作ってくれる。学校にも送り届けてくれるよ。学校が終わるころには必ず迎えにも来てくれるんだ。家へ帰れば勉強もみてくれるし、おいしい夕ごはんも作ってくれるね。お風呂にも一緒に入ってくれるし、

救いのシンボル

夜は面白い話を聞かせて床にもついてくれるんだ。僕はまだ自分で何一つ十分なことは出来ないが、お母さんが手助けしてくれるので僕は元気に学校に行くことが出来る。僕には二本しか手がないが、お母さんが僕にしてくれることだけを考えても、とても二本の手ではしきれそうにないんだよ——と。

私は千手観音さまを本尊としてお仕え申し上げて既に十三年になる。

そのお姿に身近に接していないながら私は今まで何を思い、何を願って合掌して来たのであろうか。何を学んで来たというのであろうか。

京都、奈良の寺院を訪ねる外国人は多い。美しい仏さまには感嘆の声をあげるといふが、しかし、千手観音さまは、そのお姿のゆえにあまり好評を得ないと聞いた。

グロテスクと 思う外国人

当山を訪ねる外国人も、決まって「どうしてこんなにたくさんのお手があるんだ? グロテスクだ」と聞く。

私の方も決まって「このようなくさんの手、たくさんのお目で私たちを常に見守り、支えてくださっているのですよ」と答えてきた。当然、自分もそのように信じてきたし、それは今でも変わらない。しかし、千手観音さまがそのお姿から更に重要なことを教えて下さっているのに、私は今まで気づかなかった。

私たちが幸福な時、千手観音さまの御前に座れば何を語りかけてくださるだろうか。

——お前は今の幸せを、自分で築いたと思っではないか。今の地位を築いたのは、自分の実力のなせるわざと思っではないか。私の姿を仰ぎ見ろ。お前の今の幸せは、このようなたくさんのお手のお手助け、たくさんのお人の温かいまなざし、まさに限らない「おかげさま」をいただいて築かれたものなんだよ。今こそ謙虚に感謝の心をもって受けとめよ——。

おごらず逆境生き抜け

私たちが失敗を重ね、挫折をし、逆境を迎えて生き抜く勇気を失いかけた時、また信頼していた人に裏切られ、

「あいつも俺を裏切った、あいつも俺を裏切った」と一人、二人と指を折り、

「もう誰も信ずるものか。人なんか知っちゃあいない。俺はもう俺の好きなようにする。」と怒り心頭に達した時、

千手観音さまは一体何とおっしゃるか。

——人が生きると書いて人生、生きなくてはならないのが人生、途中でやめるわけにはいかないのだよ。逆境においてこそ早くそれを切り抜け、前向きに生きよ。もし生き抜く勇気がわいてこないというのなら、私がこの千人の手を貸そう。

またお前は“あいつにも裏切られた、あいつにも、あいつにも”とわめいているが、お前を裏切ったのはせいぜい指を折るだけの数ではないか。私の姿を仰ぎ見ろ。絶対多数の善意の手、

善意の目はいちも変わらずお前を包んでいる。早くそれに気づけよ——。

目が見える

から気づかぬ

なまじ目が見えるからわからないことだつて多い。だからこそ、あえて千手観音様はそのお姿にたくさんの手、たくさん目の目をお持ちになって教えて下さっているのではないか。

私は坂村真民師の詩に出会い、大変尊いことに気付かせていただいたことを喜んでいる。

本稿は昭和五十九年十月七日
中日新聞「ともしび」に掲載
された拙稿を加筆訂正した

「千の手」創刊号（昭和六十一年五月一日）より転載。
松平山主の写真も当時のまゝです。
悪しからずご了承下さい。

手が欲しい

目の見えない子が描いた

お母さんという絵には

いくつもの手がかいてあった

それを見たときわたくしは

千手観音さまの实在を

はつきりと知った

それ以来あの一本一本の手が

いきいきと生きて

見えるようになった

異様なおん姿が

少しも異様でなく

真実のおん姿に

見えるようになった

あゝわたくしも千の手が欲しい

ベトナム・パキスタンの子らのために

インド・ネパールの子らのために

坂村真民（『み仏は風の如く花の如く』所収）

寂光院寺報

千の手の由来

毎号私の拙い法話エッセイをのせてまいりましたが、第一号では寂光院寺報の名称として「千の手」が選ばれたきっかけとなった拙稿を載せております。これは私の中日新聞デビュー作品です。もともと寂光院のご本尊様は千手観音様ですので、寺報の名称も「千の手」で宜しいのですが、実は坂村真民先生の詩が直接のきっかけになっております。

五〇号を迎えて今一度「千の手」という名称の選定理由を知って戴きたく、同文を掲載致しました。これからは「千の手」を身近に感じていただければ幸いです。

「千の手」第一号を お持ちの方へ

お手元に「千の手」第一号をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひお申し出ください。「千の手」五〇号を記念して、ささやかですが、記念品を差し上げます。

第46号（平成22年10月17日）

千の手

犬山
龍庵尾観音
寂光院

龍庵尾文化財 本堂・随求堂「平成の大修理」完成写真

平成二十二年十月十七日
犬山 龍庵尾 寂光院
表紙 龍庵尾 寂光院

第40号（平成17年8月9日）

千の手

犬山
龍庵尾観音
寂光院

龍庵尾文化財 本堂・随求堂「平成の大修理」完成写真

平成十七年八月九日
犬山 龍庵尾 寂光院
表紙 龍庵尾 寂光院

第33号（平成13年1月18日）

千の手

犬山
龍庵尾観音
寂光院

龍庵尾文化財 本堂・随求堂「平成の大修理」完成写真

平成十三年一月十八日
犬山 龍庵尾 寂光院
表紙 龍庵尾 寂光院

表紙写真

四十五号よりカラー版

法話
トピックス

- ・ 本堂・随求堂「平成の大修理」
- ・ 成満記念
- ・ 松平實胤「落慶挨拶」
- ・ 「命よりも大切なもの」
- ・ 平成の大修理「仏像三十六体」と「仏像ガール」
- ・ スロープカー運行

表紙写真

法話
トピックス

- ・ 「薬医門」
- ・ 相田みつお「いま ここ じぶん」
- ・ 「入唐がキーワード」
- ・ 空海弘法大師の足跡を訪ねる旅
- ・ 赤岸鎮く西安巡礼
- ・ 松平實禪大僧正を偲ぶ
- ・ 密蔵落成

表紙写真

法話
トピックス

- ・ 「二十一世紀絵馬」
- ・ 松平實胤「大楽」
- ・ 「さあ、二十一世紀の始まりです！」
- ・ ラジオ番組
- ・ 「松平實胤の一期一会」
- ・ 中国観音音霊場「普陀山」
- ・ 杭州・上海巡礼

平成二十四年五月二十一日

青もみじ 木漏れ日からの

「金環日食」

前略 松平山主さま

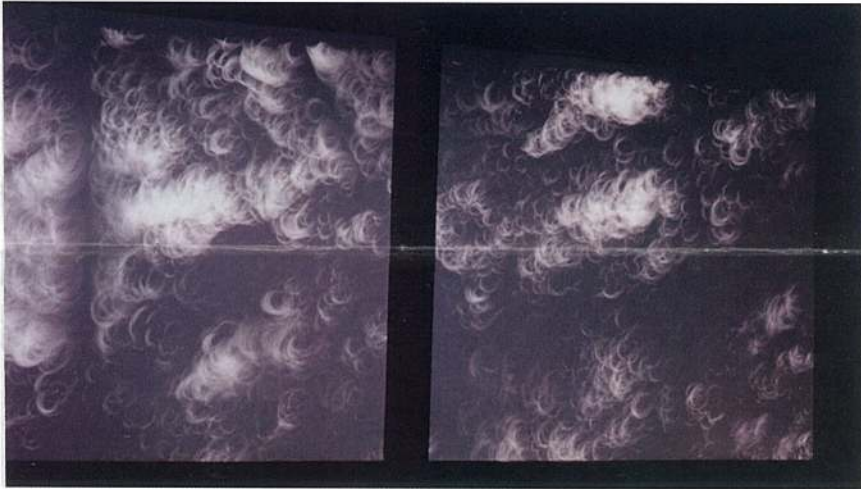
日頃から風景写真撮影影に取り組んでおり、金環日食を風景写真としてどう写すか前夜まで思案していました。朝日に起こされた時「そうだ、寂光院へ行こう」と決めて、勝手に山上の本堂東側の壁面に写り込む木漏れ日を撮影させていただきました。刻々と変化していく様は期待をはるかに超えるもので、至福の時間を過ごすことができました。その時間を共有していただきたく、つたない写真ではありますがですが同封しました。

江南市

南山町中一二三

三輪 豊

(犬山南小学校非常勤講師)



写真データ

とき 午前7時31分 ところ 山上 本堂 東面白壁

名古屋グランパス

水野泰輔君 頑張れ！

サッカー少年でありました水野君が練習に練習を重ね、努力精進の結果、見事名古屋グランパスに入団を致しました。犬山市羽黒出身で、彼の祖父母である中垣利一昌子ご夫妻が寂光院の篤信でいらつしやいます。いつも孫の健康と、孫の夢の実現を念じてみえました。去る五月四日（水野君の誕生日）、揃って寂光院に入団の報告にご参詣になりました。名古屋グランパスの隆昌と水野泰輔君の活躍を祈念してやみません。



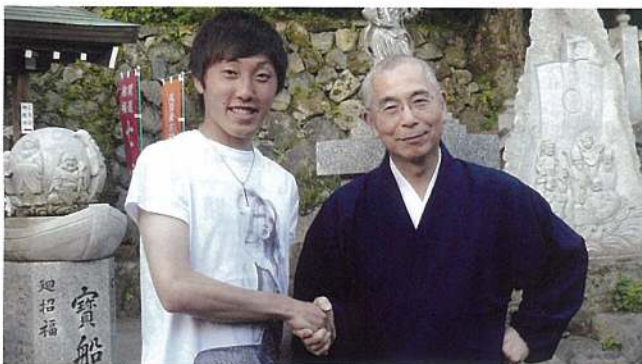
グランパス別府キャンプ

若い才能の発見に口ぶ 賢さがある」。名前が挙りも滑らかだ。18日の練習試合後、ストイコビッチ監督は珍しく特定選手を称賛した。「水野がいプレーをした。知性と」

中日新聞
平成二十四年二月二〇日付



下部組織出身で監督も注目する水野君＝実相寺サッカー競技場で



水野君にエールを送る松平山主

蚕堂（馬鳴堂）の由来

寂光院には境内のあちこちにお堂が立ち並んでいます。

山上には平成の大修理を終えた本堂と随求堂（国登録文化財）を中心として、鐘楼堂、筆弘法十二支展望台が、本堂裏には蚕堂、弁天堂（国登録文化財）が立ち並んでいます。

実は寂光院に現存するお堂で、建立年代が一番古いのが、蚕堂です。堂内にご本尊馬鳴菩薩のお厨子がございますが、その鍵が歴代の住職に伝承されてまいりました。

それには次のように記されております。

一、文政六年（一八二三）

正月一七日再建

二、番匠 竹中和泉掾

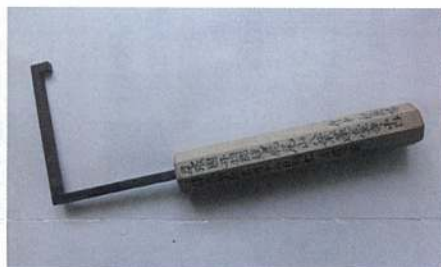
（竹中第九代目当主）

※現当主は

（株）竹中工務店社長、

竹中統一氏

（竹中第十六代当主）



て、養蚕業は元氣を失い、昭和三十四年の伊勢湾台風がさらに追い打ちをかけたといわれています。

実は寂光院の蚕堂も伊勢湾台風で倒壊、その後、費用の面で縮小されて復原され、現在のお堂になったと伝えられています。

（写真はお厨子の鍵）

三が四日（三月四日）
四が三日（四月三日）

大祭

犬山近辺、いや尾張、美濃一円は養蚕業の盛んなことで全国でも有名でした。

扶桑町はその名の通り桑畑の多い地域でした。この蚕堂の大祭が三月四日、四月三日でありました。とにかくその日は参詣する人で寂光院の近辺は身動き出来ぬほど、幹線道路の犬山の魚屋町、余坂町の商店街は大層な賑わいであつたそうです。

しかし、戦後は化学繊維に押され

くしくも今年四月三日の
春嵐であわや倒壊寸前！

大改修に着手

大型台風並みの春嵐に見舞われて、山の倒木が蚕堂の屋根にあたったり、またお堂そのものが大風の影響で左に大きく傾きました。再建か廃棄処分かの議論を重ねましたが、寂光院の伝統の建物ですので、修復することに決まりました。

（大改修予定の蚕堂）



馬鳴菩薩（めみょうぼさつ）

「衣」をつかさどる菩薩様

〈ファッション、デザイン〉を

始め糸偏のお仕事の守護仏

表紙写真は養蚕守護のお札様として蚕、機織り、衣料販売に携わる皆様の心のよりどころとされてきました。六十代後半以上の方には見覚えがありませんか。

この菩薩様のお名前はその美しいお姿には不似合いな「馬が鳴く」と書きますが、伝説によれば、この菩薩様が誕生された時、多くの馬が感動して鳴き声を上げたとか、この菩薩様は美しい声で説法されるので多くの馬が鳴き声をあげて感動を表現したという故事にちなんで名付けられたそうです。

原発事故への反省

日本が福島原発事故から何を学び、行動するのか、世界が注視しています。

解答は「脱原発！」